

震災俳句の可能性

太田 かほり*

平成 23 年 3 月 11 日の東日本大震災、その後の福島第一原子力発電所の事故は、世界に大きな衝撃を与えた。日本は、政治・経済はじめあらゆる面において根底から見直さざるを得ない状況へと追い込まれた。人々の受けた衝撃は計り知れず、収拾のつかない混乱や感情を抱えつつも、やがて、それらを表現したい、しなければならぬという意欲に突き動かされ、それぞれの形式をもって表現するという動きが出てきた。映画や写真も一つの方法であるが、文芸においても小説や詩歌などの分野で震災をテーマにしたものが作られてきた。伝統文芸である短歌や俳句は短詩形という特色により、年齢や職種を問わず幅広い人々の創作の手段となり、夥しい数の作品が作られ、今なお詠み続けられている。各新聞社の俳壇・歌壇には、直後から震災関連の作品が登場した。国民文芸といわれる俳句の創作は、専門家・初心者・愛好家を問わず、その数は最も多いと推定される。俳人としては、被災者である小原啄葉・高野ムツオ・照井翠はじめ、大に小に被災地にかかわりのある作家の活動が注目される。小原啄葉は翌平成 24 年 5 月に句集『黒い浪』を、照井翠は平成 25 年 7 月に句集『龍宮』を出した。俳句は花鳥諷詠という言葉が示すように素材を自然そのものとしてきた。歳時記の季語は自然・気象・祭事・行事・動物・植物・生活などに分類される。俳句は「もの」を詠むべきものとされ、「ことがら」は詠む対象外とされており、震災や原発事故は後者に分類される。俳句史には戦争を詠んだ渡邊白泉や西東三鬼の存在は確乎たるものであるが、多くはない。国中を震撼させたこのたびの震災や原発事故が国民文芸である俳句に無関係であることはあり得ない。しかし、長期的な視野でそれらが一定の評価を維持できるかどうか、投げかける問題は大きく、課題も多い。

* 人間学部児童発達学科

一、被災地の俳人たちは震災をどのように詠んだか

1、釜石市在住 照井翠の俳句

【略 歴】昭和 37 年花巻市生れ。平成 2 年「寒雷」入会，加藤楸邨に師事。平成 14 年現代俳句新人賞受賞。釜石市立釜石高校教諭，勤務先で震災に遭遇。

【考 察】極限状態での絶望，怒り，悲しみ，苦悶などの感情はしだいに浄化され，俳句の形を以って昇華されていく。俳句史の中では，「戦争俳句」が確乎たる位置付けをされ，評価されている。「俳句物説」に従えば時事俳句は作りやすく，震災を詠んだ俳句が文芸として長く残るためには高いハードルを越えなければならない。普遍性という文芸における最も重要な要素をもち得るかどうか。震災俳句としては，我々はすでに，平成 7 年 1 月 17 日の阪神淡路大震災を詠んだ永田耕衣や友岡子郷を経験している。これらは今も強い感動を呼び起こす作品である。照井翠の俳句は，未曾有の大災害の渦中の大小のもろもろを削り落として，人間存在への徹底的な懐疑からかすかな肯定へのさ揺らぎが認められる作品へと変化を見せている。深い喪失感は虚無感へ向かわせるが，降るだけ降った雪が自然界の変化によって自力で解け去る現象のように，この句集自体が奥底に地熱のような温みを宿しているように思えてくる。東日本大震災後も日本列島は大小の自然災害や人災に見舞われている。凄まじい破壊の跡から人々は自力で立ち上がる。その長く困難な過程で，この句集は読み継がれるだろう。記録性が勝った当初の作品がしだいに一句としての普遍性を備えた作品へと変貌していくところを評価する。以下，句集『龍宮』をひもとく。

喪へばうしなふほどに降る雪よ

照井 翠

冒頭に置かれた句である。喪う，失う，うしなう。失ってよいものがあるだろうか。失ってよいものならば失うとはいわない。命を失い，家を失い，仕事を，生活を失い，さらに明日を見失い，道を失う。人間の存在を支えるもの，重要なものもささやかなものもことごとく失ってしまった人々の上に，雪が降り続く。降る雪が深い喪失感に追い込む。降る雪に罪も科もない。だが，降ればさらに喪失感が深まっていく。失ったものは数限りない。何もかも失った。何が残ただろう。何かが残っているだろうか。空しい疑問はすぐにうち消されていく。雪は無心に降り続ける。無慈悲に降り続ける。とめどなく降り募る雪，その速さ，その嵩を上回って喪失感は募っていく。あたりを埋め尽くしてやまない雪さえ，追いつかない。失ったものがずんずんと膨らんでいく。3月11日は真冬にも等しい厳寒の夜となり，雪交じりの雨となった。その後，雪が降り，長く冬が居座った。この句ができるまでには，どれほどの時間が経ったことだろうか。冒頭に置かれた意味に等閑ならぬものがあるだろう。どの時期に詠まれたものか。句集を編むその当時の最後の最後に至りついた心境では，おそらくないだろう。

双子なら同じ死顔桃の花

照井 翠

親兄弟や家族が同時に死ぬなどということは平時にはあり得ない。歴史上では，天変地異や

戦争などの非常事態の最中に、あり得ないことが普通のことのよう出来た。ある博物館で見た親子のミイラは彼らを見舞った疫病というものだった。どんな悲惨な事実も昔むかしのこととして見る時には余裕があるが、その非現実が今現在のこととなるととうてい受け入れ難い。姉妹の死顔。直前の雛祭との落差。双子であればそれだけで話題はつきず、周囲の関心を集めただろう。双子ゆえに、その雛祭はどんなに華やかだったことだろう。喜びが二倍にも三倍にもなるのが偶数のトリックである。それが、二つながら亡骸であるという非情が肯えない。二人姉妹が死という局面においてまで二人一緒であることの残酷さ。同じ顔で生まれ同じように育ちながら、それぞれに一人ひとりとなっていくはずの未来が閉ざされたのである。桃の花は優しい。少しの慰みにはなるが、手向ける者の絶望、悲愁がこの句の背後を覆っている。

春の星こんなに人が死んだのか 照井 翠

平成25年9月10日警視庁発表の死者は、12都道府県で15883人、不明者は2654人である。「こんなに」は、犠牲者の数への驚きであり、溜息であろう。季語を除いた中七下五の「こんなに人が死んだのか」という口語による表現が胸を打つ。眩きのようにも絶叫のようにも取れるが、季語の「春の星」の下でのこととなると、思わず出た眩きのように思える。何度も頭を過ぎる数が夜空を見上げているうちにも浮かんでは消えて、そう眩かせたのだろう。忘我に近く、しらずしらず涙ぐんで潤んだ目で、潤んだように瞬く春の星を見上げていたのだろう。

つばくらめ日に日に死臭濃くなりぬ 照井 翠

震災からまる二年後、筆者は、遅ればせながら被災地を訪ねた。三陸海岸の津々浦々、そのどの小さな津にも浦にも津波痕が残っていた。女川湾・志津川湾などに沿って歩いた。瓦礫は片寄せられ、更地が広がり、のっぺらぼうとしたがらんだような印象を受けた。ふと、どこにも物の匂いのないことに気付いた。震災は匂いまでも消し去ったかと思ったが、そうではあるまい。「日に日に死臭濃くなり」ゆく現実を、必死になって防ぐ作業があったはずである。消したい匂いと消したくない匂いのはざまに無機質な匂いが漂う。二年も経って今さら行ってもといわれながら行って見たが、匂いの消えた土地に立って見えるものがあつた。

毛布被り孤島となりて泣きにけり 照井 翠

泣くほかなく泣く。何に泣くか分からなくなって泣く。寒さに泣く。毛布一枚に泣く。作者は勤務する釜石市立釜石高校で震災に遭遇し、避難所となった同高の体育館で三百数十名の生徒達と過ごした。一枚の毛布に4、5人がくるまって横たわったという。毛布を被って泣いたのは生徒達でもある。孤島は生徒の一人一人でもある。亡くなった保護者が24人、両親を亡くした生徒が4人、片親になった生徒が16人、その他兄弟姉妹ら多くの家族を失い、大勢が帰る家を失った。

卒業す泉下にはいと返事して 照井 翠

私事ながら、東日本大震災は筆者が勤務する大学においては卒業式の予行中であつた。併設の高校は謝恩会の最中だつた。三月の学校カレンダーは卒業式関連の行事で埋まっている。その三月の大惨事は悲しいエピソードを山のように築いた。卒業生の一人一人の名前には在学中

の時間の記憶が凝縮している。呼称の任に当たる教員は、前途に幸あれと祈りながら、万感の思いを込め、厳粛な気持で呼び上げていく。番号順に全員の名を誦んじている教師も少なくはない。公の場で教師はこれが最後のフルネームを呼び、呼ばれた者は学び舎での最後の返事を力を込めて返す。「はい」と応える一人ひとりの声がいつまでも耳にとどまる。淡々と呼んでいくのだが、思いは深い。溢れ来るものを止め得ない。卒業式とは前途を祝福するものでもある。だが、この世にいない者の名を呼ぶということが起こった。「泉下」とは死後の世界をいう。若者に最も似つかわしくない場所である。そんなところから「はい」と返事が返ってこようとは、作り事のようなこんな悲しいことが、あの三月に、数限りなくあった。

地球とは何 壊しては雪で埋め 照井 翠

「地球とは何」と問うのは、理科の教室が相応しい。青少年が好奇心に満ちた眼差しで宇宙の不思議に目覚めて発する質問ならば、どんなに希望に満ちていることか。そして、いくつもの可能性を含んだ答が示されることだろう。実際、震災前までは作者の勤める高校の教室でもこんな質問が投げかけられ、生徒の向学心を刺激していただろう。今、作者が、「地球とは何」と、耐えかねて発した問いかけには誰も応えられない。形あることごとくを完膚なきまでにうち壊し、形のないものも徹底的に破壊した地球への底知れない懐疑が膨らみ、憎悪を掻き立てる。雪は瓦礫の上に降り積もる。壊すことにも、埋めることにも、意味は、ない。無意味な行為の主体が地球だと気づいた作者は、「地球とは何」と疑問を發し、得られない答に悶絶する。

位牌抱き笑ふやうなる死顔よ 照井 翠

はっとした瞬間に仏壇に駆けより位牌を抱いて、それから逃げるという行動をとる人が現実には何人もいることを改めて知る。日本人の先祖への気持の強さがここに出ている。守るべきはまず自分の命であると震災後の学校教育は徹底するようになった。他者を気遣う前に自分の安全を確保せよと防災教育は強調するようになった。その通りである。「津波でんでんこ」は貴重な体験から語り継がれ、改めて伝承の意味が評価され直されている。しかし、とっさに仏壇に駆け込んで位牌を守った行動を責めることはできない。何も持たずにすぐさま行動すれば万が一にも助かったかもしれない命である。どの道助からなかったとしても、最後に取った行動によって死者は強い感動を残した。死顔が「笑ふやうなる」のは、位牌と共にある責任感や安心感や満足感ゆえであろう。地震や津波の犠牲者が笑い顔であるはずがない。数々のエピソードの中にこんな事実が交じっている。

泥の底繭のごとくに嬰と母 照井 翠

「繭のごとくに」の比喩に、発見された時の母子の亡き骸の形が浮かんでくる。泥の底から出てきた泥まみれの丸みを帯びた塊を繭のように感じたのである。繭は一時的な静止の形であり、時がくれば再び活動を開始する。変態を行う昆虫が蛹になる時に作ってこもる殻状のものを繭というが、母親は、死の淵で、嬰兒と自らを守るべく口から糸を出してぐるぐる巻きにし、静止状態を作ったのである。絶体絶命のその時、母親が本能的に咄嗟にとった行動をこのように想像する。母親は小さな命を自らの身体で丸ごと包み込んだのだ。繭という比喩の奥に、生

き物の生存をかけた行為の意味が隠されている。

方舟の善民はみな吞まれけり

照井 翠

一軒ずつの家が、一艘ずつの船が、さながら小さな方舟のように大海に流れ込み、波のまにまに吞まれていった。大波を被り、海底に沈み、再び浮き上がり、三度沈みながら海の藻屑とになっていった。ノアの方舟を思えば、善人は楽園に漂着するはずである。民は一人一人をさす。どの家の一人にもどの船の一人にも、奇跡は起らなかった。

三・一一神はゐないかとても小さい

照井 翠

「神はゐない」と思うような事態をしばしば見聞きしてきた。個人や集団や国家間の悲劇など、神から見放されたような惨劇は、地球上に絶えることがないが、東日本大震災はまさに「神はゐない」と思わせられる出来事である。俳句として上五に「三・一一」と置いたところは普通であるが、その後に「～か～」と置いた文体に特徴がある。少なくとも「～か」までは考えられるが、「とても小さい」の口語で投げ出したかのようなフレーズに驚く。不謹慎の誇りはあるが可笑し味がある。泣き笑いに怒りを含んだ率直さというべきだろうか。

なぜ生きるこれだけ神に叱られて

照井 翠

人はしばしば自問自答する。人間であるということは自らの存在についての問を繰り返すものである。いつの時代のどこの国の人々も「なぜ生きる」と自らに問い続けてきた。この問は殊に若者を苛む。若さはそれを追究させる。答を求めて煩悶することから人間らしさが備わってくる。そして「如何に生きる」という問へと進んでいく。そのようにして人の一生も人間の歴史もつむがれてきた。よりよく人間であるために通過すべき問であった。しかしながら、「これだけ神に叱られて」というフレーズが続く問としてではなかったところが、これまでとは違う。普遍的な自問自答が特殊な状況下で眩かれたのである。否、絶叫かもしれない。「叱られて」に泣かされる。「怒られる」ではない。前者には道理がなければならぬ。無闇矢鱈に感情に任せて人を責める場合には用いない動詞を用い、自分に叱られるだけの非があることを認めればこそ「叱られて」となった。しかも「神」に叱られるというのである。神はいついかなるときも正しいはずである。神のすることに間違いがあるはずがないと作者は疑わない。多少の非があることは誰も間違いのないことであるが、それにしても、正しいジャッジをするはずの神が下す罰の大きさをゆえに、畏れ多くも異議を唱えてしまったのである。人のすることならば間違いもあるが、受け入れるにはあまりにも無慈悲な仕打ちである。幾度となく現実を打消し、その度に現実を思い知らされ、打ちのめされ、茫然自失しては、弱々しく「なぜ生きる」と自問するのである。

このように鑑賞してきて、やがて、この句には季語がないことに気づく。俳句は季節の詩であり、季語は最も大きな要素である。それにもかかわらず、この句に強い感動があることを否めない。無季の句が俳句の範疇から外れるものではないことを思わせる。

人呑みし海に向かひて黙禱す

照井 翠

これも無季の句である。春の海であれば季節とはうらはらの悲しみが身を苛み、冬の海であ

れば被災当時の絶望や混乱がそのまま呼び起こされて生き地獄へとつき落とす。巡る季節は人の慰めになり薬になるものであるが、同時に、諦めきれないものへの決別を強いてくるものでもある。巨大な獣のような凶暴性を見せたその同じ海に、今も多くの命が漂い沈みその魂がさまよっているのである。季節がいくたび巡ろうとも、無心に海に向い合うことは困難である。海への感情をさまざまに変化させながら、複雑な思いを身の内に飼い慣らししていくことになる。この句の季節を特定することに意味はない。特定されない季節、すなわち、あれ以来、いつも、いつも、常に海に向かい、恨みののしりつつ祈るのである。

ありしことみな陽炎のうへのこと 照井 翠

「ありしことみな」に含まれる一つ一つを想像してみる。例えば、住み慣れた家、加わった家族、あの日の笑い、かの日の涙等等、絵巻物をひもとくように際限なく数えられてくる。過去を表す助動詞がこれほど切なく響いてくることはない。「ありしもの」としても手放し難い一つ一つであるのに、物質的なもののみならず「ありしこと」という精神的な世界も消え去ったのである。幸せとはいまい、日常のささやかで平凡で何でもないものの一々が奪い去られたのである。取り返すことのおよそ不可能な過去が次々に去来する。確かに現実であったもの、それらがことごとく陽炎の上に存在したという認識の苛酷さに頭を垂れるのみである。

しら梅の泥を破りて咲きにけり 照井 翠

梅は他の花に先駆けてまだ寒さの緩まないうちにほころび始める。東北地方の春の訪れは遅い。それだけに開花が待たれる。いつの春もそうであったにちがいない。清らかな梅のそれも白梅が泥を破って咲いた。樹木全体が他のもの同様に泥を被ったままになっていたのだろう。泥の海は比喻ではない。現実には泥だらけの樹木が花をつけて梅であると名乗りをあげたのである。日本人の最も愛する花の一つである。日本人に特別な意味をもつ白梅である。汚れなき一輪である。駆け寄ったことだろう。一輪の梅に涙を流したことだろう。梅が咲いた。災害に負けずに咲いたのである。自然界の変わらぬ営みが被災者を勇気づける。自然は、やはり、人生の伴侶だったのだ。

流灯にいま生きてゐる息入る 照井 翠

盆の最終日、小さな灯籠に火を灯して海に流す。この世に戻ってきた死者の魂を再びあの世へと送り返すのである。新盆は淋しい。多くの家族や知人や隣人を津波で失った被災地の新盆はいかばかりであったか。自分が生きていることの奇跡に瞑目する人々も多かったことだろう。助かった人々の多くが、あなたが死んで私が生き残ったことに罪悪感を抱いて苦しんでいるという。助けられなかった命、見殺しにした命に苛まれて、被災者はどこまでも自分を責め続けているという。苦しみは苦しみを倍加し累乗倍していく。自分は今生きている、その証拠に流灯に今熱い息を吹き込んでいる、作者は自分の生を確認しているのである。

浜いままふたつの時間つばくらめ 照井 翠

過去と現在、この二つの時間がつながらない。3月11日を境に大きく切断された時間が別々にある。浜は姿も形も変えてしまった。「いまま」は直後から月日が経ったことを思わせる。

働く場であり生活の場であった浜は、整然とまた雑然として活気がみなぎり、ものの匂いや音があった。その後、ことごとく破壊され、瓦礫の山に占拠されて、やがてなにもないのっぺらぼうの更地が広がり、あるべき匂いも音も消えた。徐々に新しい空間が形作られていくことになる。浜が姿を変えて復興がなされたとしても、そこには津波前と津波後の異なった二つの時間が同時に存在することになる。人々は二つの時間を行ったり来たり、何度も時を跨いで今日の一日を生きる。変わらないものがあるとすれば、燕。いつやって来たのだろうか。もう、そんな季節になっていたのかと思う。燕にも古巣はない。燕は泥を運ぶ。その泥の変化を燕は知るだろうか。「つばめつばめ泥の好きなつばめ」は、その泥に混じる涙を知るだろうか。

ふるさとを取り戻しゆく桜かな

照井 翠

日本人は桜と共に歩んできたことを改めて思う。壊滅的な被害を受けてその年の花見の行事は各地で自粛されたが、翌年からは復活し、桜こそが被災地を元気づけるものであることを、認識したのであった。「さまざまなこと思ひ出すさくらかな」は芭蕉の句であるが、大震災を経験してこれほどの打撃の中でも桜が日本人の誰の心にも深く沁み入る花であることに感動させられた。人生の禍福を超えて桜は人の心を洗う。ふるさとに桜は咲き、被災地に桜が植えられ、樹木そのものは違っていても、それぞれがふるさとを実感する。「ふるさとを取り戻しゆく」困難な道のりに桜が咲く。

この句に至るまでの作者の心身の遍歴を改めて思う。ふるさとに咲き始めた桜を目にも心にも涙を湛えながら見たことだろう。阿鼻叫喚の現場から瓦礫の山々へ、やがて更地の広がり、見慣れない景色を作った。しかし、そこが紛れもなくこれまで住み、慣れ、これからも暮らしていくふるさとである。受け入れ難い思いを少しずつ消し去り、再びふるさととして愛惜の念を育てていくのである。冒頭の「喪へばうしなふほどに降る雪よ」の句同様、文芸としての普遍性を宿した作品である。激動の日々の数々のドラマを句の奥に包みこみ、平易な言葉を以って今現在のふるさと釜石と自己を描いた。身体の内から静かに湧いてくるものに心を澄ませ、それを大切なものとしてしっかりと迎え入れようとしている作者である。ふるさとが再び作者の原点となっていくことに感動する。桜はそこになくしてはならない。文芸上のふるさとと桜がこのような形で新たに描き直された。温かな涙を浮かべた作者像が見えてくる。

2、盛岡市在住 小原啄葉の俳句

【略 歴】大正10年岩手県生れ。俳句結社「樹氷」名誉主宰。平成24年3月、句集『黒い浪』を上梓。後書きに「震災の俳句はもとより難しい。言葉の力にも限りがある。しかし、あの恐怖、あの惨状を少しでも伝えおくために、あえて一書をまとめることにした。」と記している。

【考 察】作者の言葉を引用する。「愚かなる戦争を二度と繰り返さないためにと、先に戦争の俳句を作った。さらに、こたびは未曾有の大震災や原発事故に遭い、とても詠まずにおられなかった。」

時の日の時計をはげす遺体かな

小原 啄葉

時の記念日は6月10日であるから、3・11から3か月後に遺体が見つかったことになる。何とも重たい時の流れであり、折しも「時の日」という巡り合わせがなおさら悲しみを深くする。家族はじめ多くの知人友人が消息を探しあぐね、かすかな希望をつなぎながら搜索の日々が続いたこと。見つからなければ希望は残るが、遺体の発見は否応なく最悪の事態を認識させられることになる。3か月は長い。その3か月の時間を遺体の時計はその肉体と共に止まっていたのである。もしも津波に呑まれたのならその時刻をさしていただろう。いや、瓦礫の下敷きになっていたならば持ち主の息の根が止まった後も時計は時を刻んでいたかもしれない。犠牲者は動く時計を腕に感じながら残りの命をつなぎ、やがて息絶えていったかもしれない。その時間はどれほどだったか。後者の想像はあまりにも辛い。しかしながら被災地の現実はいくらいの残酷さではないだろう。遺体に腕時計がつけられていたという現実には平常の死を意味しない。その非現実をリアルに表現した。時計とは、思えば現実そのものである。命を計るのも時計である。死の宣告も時計による。被災地の悲しみはあまりにも巨大であるが、その一端を即物的に詠んで胸に迫る。

みちのくに日本あつまる年の暮

小原 啄葉

平時ではない歳晩である。平時は、大方の関心は中央に向けられがちである。誰がみちのくという言葉を作り出したのか、道の奥に在るという認識をいつの時代にしたのだろうか。都から遠く北に位置するという地理的条件は物や事柄によっては負の要素を含む。経済も文明も都会のように発達しない故にみちのくのそこはかたない悲哀は拭えない。しかしながらみちのくに誇るべき文化の伝統と継承がある。そうしたみちのくに日本の関心の全てが集中した。東日本大震災と原発事故が原因である。日本人の一人一人がそれぞれの形で被災地に思いを寄せたことへの、被災地にいる作者からの返礼の一句である。

神戸より鬼来てくれし節分会

小原 啄葉

鬼と節分の組合せで驚いたり泣かされたりすることは普通はないが、「来てくれし」といい、「神戸から」といい、思わず涙ぐんでしまった。温かい涙である。未曾有の災難を被って癒えない傷を抱いた神戸の人が、同じく未曾有の災害の渦中で苦闘し絶望する人々のところに節分の鬼の風体を借りて参じたのである。経験しない者には解らないというのではないが、言葉なしで、その存在だけでほろりと、いや、どっと泣ける相手がそれほど多いとは思われない。神戸から差し伸べられる手は悲しみと苦しみをすべて受け止めるばかりか、未来への光も指し示すものであっただろう。「来てくれし」という口語調にうれしさが滲む。有難いことを素朴に有難いと思うのはどん底を見た心からくるものだろう。また、最悪の状況においても俳諧精神がほの見える点にも感銘を受ける。鬼は追っ払うものであるのにその鬼が来てくれたとした。絶望の中の笑いは希望へとつながる。豆撒きが終われば立春である。みちのくにも待っていた春が巡ってくる。

逃水の行けども行けども逃げる国

小原 啄葉

近づけば逃げる。なお追えばまた逃げる。逃げて逃げて決して近づけないけれど、これ見よがしにいつまでも目の前に見えている幻の水である。平和な時には春の陽気のなせる現象として麗かな気分を損なわないが、未曾有の大震災後の非常時においてはもういい加減に正体を見せると怒りに駆られる。作者は大正10年生れ。大きな戦争も、大災害も、何度も経験してきた90余歳をして、かくも嘆かせる国とは、他ならぬこの国日本である。「大和しうるわし」を心に擁している故に、この国のあらまほしき姿を希求するのである。幻の水はそのあらまほしき国のことでもある。追わずにおれない愛すべき我が日本である。震災後、俳句のあり方も問われているが、この句は一つの方向を示している。

独楽打ちし地べたを残し村亡ぶ

小原 啄葉

〈お正月には凧揚げて 独楽を回して遊びましょう〉と歌われた通り、独楽は正月の楽しい遊びだった。この歌が口ずさまれる世代はまだ多い。戸外や土間などで遊ぶのが普通だった世代の郷愁を募らせ、人生のスタートの頃の記憶をたどらせる。独楽を回した背景には、故郷の山河や家族、それにまつわる日常、平凡な生活の穏やかさがあった。独楽は、それ一つから子ども時代のすべてを回想させるほど、しみじみと懐かしい季語である。季語一つでどのようにも想像を膨らませて遊ぶことができるという意味で、俳人にとっての玩具は季語といえるかもしれない。作者は独楽という季語を手がかりに思い出に遊ぶ。記憶につながる地べたから蘇る温かな過去へ近づこうとして、地べたがささやく声を聞こうとして、目の前の現実の光景に阻まれる。見慣れたものが「地べた」だけしかないことに打ちのめされ、絶句する。繰り返して何度も絶望しつづけて、何度も嗚咽を繰り返す。まなうらに在りし日の村を復元しては、その都度、かき消される。その昔、作者を遊ばせた「地べた」が、今、作者を泣かせる。読者は「村亡ぶ」から作者の年齢分の歳月をさかのぼりつつ、被災地の今を想像する。

がらんどうのあめつちなれど春の虹

小原 啄葉

町が破壊され、瓦礫が山をなし、やがて取り去られ、跡に更地が広がり、徹底的ながらんどうが出現した。音も匂いもない。生き物の気配の一切がない。その無機質な空間にはものの息吹というものが無い。在ったものの消滅と在ってはならないものの撤去は、茫漠とした虚無感を漂わせ、簡単には涙を流させることも許さない。これまでの我々が認識する「がらんどう」は質を変え、初めて経験する別種のがらんどうが出来た。生活の欠片までも徹底的に消し去ったがらんどうである。和語「あめつち」とは天と地、全世界をいう美しい言葉である。また、我々は、言葉の財産として、天（あめ）・地（つち）・星・空・山・川・峰・谷・雲・霧・室・苔・人・犬……と続く「あめつちの詞」を持っている。そこには天地にあるべき自然が数えられ、人が、犬が、登場してくる。しかしながら、被災地の天地はがらんどうと化し、作者の記憶の天地とはかけ離れた姿を見せている。その絶望の天地に、今し、春の虹がかかった。見上げる作者のまなうらに、再び、かつての我々の天地が描かれていることに、感動を禁じ得ない。

3. 多賀城市在住 高野ムツオの俳句

【略 歴】昭和 22 年、宮城県生れ。宮城県多賀城市在住。俳句雑誌「小熊座」主宰。

【考 察】NHK 学園「俳句春秋No.126 号」に掲載の伊香保温泉俳句大会での講演記録より引用する。仙台市駅前の地下街で地震に遭遇し、激しい揺れの中で「これは俳句を作らなければいけない」と思い、この恐ろしさを表現するのに季語はいらないと咄嗟に判断し、〈四肢へ地震ただ轟轟と轟轟〉と詠んだ。過酷な被災状況の中でも俳句を作る理由として、①その瞬間というのはそのときしかない、②俳句を作ることが心の支えとなっている、③被災の現場にいる俳人としての義務感のようなもの、と述べている。震災直後に自ら体験した震災そのものを衝撃的に描いた作品は、時間とともに内面化され、昇華され、その様相を変えていく。これらの中に俳壇はじめ広く話題に上り注目された作品があり、今後長く読み伝えられていくと思われる。経験に裏打ちされた強さ、表現者としての使命感が伝わってくる。

車にも仰臥という死春の月

高野 ムツオ

人は自在に仰向け、うつ伏せの姿勢をとることができるが、この両方が自然にできる生き物が他にいるだろうか。昆虫ならば蟬や兜虫などが地面で仰向けになっているのを見かけるが、牛馬・犬猫・その他身近な中には思いつかない。人間を除く哺乳類など高等動物は仰臥という無防備な姿勢はしなさそうである。自動車が仰向けになっている現場を映像で見て、その不自然な恰好に衝撃を受けた。普通には有り得ない恰好である。その不自然な光景を震災後の映像が映し出した。半回転して上下が逆さまになった車がいたところに見られ、巨大地震の凄まじい威力を実感させた。何人がかりで試みたら車一台がこうなるだろうか。恐怖を視覚に訴える場面である。人の最期は仰臥の形に整えられる。これが死というものの形であるからである。「車にも」死の形があったか、人間にならってそんな恰好をするということか。巨大な物、頑強な物が無惨に破壊された。説明のつかないような力が働いて、不気味な壊れ方をした建造物も多い。横倒しならば車に起こり得る壊れ方であるが、仰向けはバンザイの形、四肢ならぬ四輪を露に降参を表明したかのようなのである。愛車という言葉があるように、車は持ち主に愛される。単なる流通や移動の道具であるだけではない。車を生き物のように捉えたところから「車にも」「死」を用いた。

膨れ這い捲れ攫えり大津波

高野 ムツオ

俳句は名詞の文学である。例えば、花は咲くといわなくても咲くと分かり、月が出るといわなくてもよく、雪はわざわざ降るといわなくても理解される。花が美しい、月が丸い、雪が白いなどとも言わずもがなである。動詞や形容詞はできるだけ用いないで描写するのが俳句とされている。つまり、俳句は十七音の最小の詩である故に、省略できるものはすべて省略する文芸とされている。その常識からすると、この句は「膨れる」「這ふ」「捲れる」「攫ふ」の四つの動詞を連続して並べた異色の作品ということになる。連想ゲーム式に津波からどんな動詞が浮

かぶかといえは、「襲ふ」「来る」が一般的である。今回の大津波を経験をするまでは、この句に使われた動詞の中で「攫ふ」以外はなかなか連想し難い動詞であったといえる。「波が攫ふ」「波が膨れる」は目撃される様態ではあったが、少なくとも「這ふ」「捲れる」は波の描写には使われない動詞であった。我々は今回の津波で想像を絶する映像を繰り返し、また夥しく目にして、呆然とさせられた。息を呑み、目を疑う光景であった。この大津波の様子を表現するのに言葉がなかった。これらの四つの動詞の一つからは十分に表現できず、これら四つを連打するかのようによ用いても過不足なしとはとうていいえない状況であった。「膨れ」からあの時の恐怖に再び襲われ、「這い」からはあり得ない光景が再現され、「捲れ」から倒壊し破壊された建造物の無惨さが浮かび、「攫えり」からは絶望的な虚無感が広がっていく。経験したことの無い地球規模の現象は、これまでの俳句の方法では表現が不可能である。この句から映像のようなあの光景が浮かんでくるものなのか、あの光景を見ていたからこの句に臨場感を感じるものなのか。俳句の課題がここにも表れている。

鬼哭とは人が泣くこと夜の梅

高野 ムツオ

哭の字を初めて見たのは高校の国語の教科書だった。宮沢賢治の詩「無声慟哭」は妹の死を詠んだものだった。漢和辞典を調べると口を大きく開けて声を上げて泣くことという説明があった。その後、杜甫の「兵車行」に「君見ずや…、新鬼は煩冤し旧鬼は哭し、天陰くもり雨湿うとき声啾啾たるを」という件で、戦乱の悲しみを詠んだものと習った。ずいぶん後になって、加藤楸邨の句集「野哭」を知ったが、戦争への悲しみが句集名に表れている。辞書的には、鬼哭は、死者の霊が生前の不遇を訴えるかのように泣くこと、またその声をいう。鬼とは、子どもが使えば昔話に登場する想像上の怪物のことであるが、古語としては死者の靈魂がこの世に現れたものをいう。この句の「人」は死者ではなく、震災・津波に耐えてこの世に生きてとどまった人をいったものと理解する。生きている者があたかも死者のように泣くというのである。生きていることの不遇を訴えて慟哭するのである。生き地獄という言葉の通り、死者のみならず生き残った被災者の絶望も計り知れない。死者と同様のことが生者を襲っている。死からの第一歩のその一歩の手立てがない。死霊に対する生霊の思想が我が国にはあるが、生きている人の靈魂が肉体を放れてさまよう。肉体と精神の統一が不可能な状態で決定的な絶望を泣くのである。生き得た人を泣かせるのである。梅は厳冬に耐えてまだまだ寒い頃に蕾み、一輪一輪と開き、夜にはよく香る。人は夜に激しく泣く。闇に紛れて哭く。声を上げて哭く。その耳にかすかな春の足音が届いたのだろうか。

天地は一つたらんと大地震

高野 ムツオ

天地がひっくり返るということが本当に起った。天にあるはずのものが地に転がり、地にあるはずのものが天に舞い上がった。海に浮かぶ船が陸地へ、地に建てられた建物が海へと運ばれた。天地が境目のない一つになろうとして大地震を起こしたのか。そうかもしれない。さまざまな疑問がわいてくる。それらの疑問への答えは見つからない。

常の座へ移るオリオン大地震

高野 ムツオ

天地がひっくり返って修羅場を残した。何を見ても何処を見ても、それが何か、そこがどこかも判然としない世界が広がっている。変わらないもの、普通りのもの、見慣れたものを見たい。オリオン座は冬の夜空にかかる美しい星座である。絶望の淵から「常の座へ移るオリオン」を見上げた。「常の座」の有り難さを思う。

泥をかぶるたびに角組み光る蘆

高野 ムツオ

春まだ浅く、蘆が角組み始める季節は、風が光り、水が輝き、大気も明るく感じられてくる。水辺の早春の柔らかな変化は人々の喜びを広げていくものである。震災当時、海につながる川は町や村を呑み込んで大きな脅威となった。長く大混乱が続き、泥に覆われたにもかかわらず、いつしか、いつもの巡り来る春の訪れがあった。蘆がつんつんと角のように芽吹いてきたのである。泥を被り、濁り、また泥を被り、被災後の傷が深く残る水辺に、優しい光景が始ろうとしている。風が光り、水が温み、ものみな輝きを帯びてくることに慰められつつ、やはり、悲しみはこみ上げてくる。

春光の泥ことごとく死者の声

高野 ムツオ

春の日差しを浴びた土は湿り気を帯びて黒々と艶を増している。その泥に触れば泥が声を上げる。否、泥ではなく、泥に埋まったままの死者が声を発するのである、そのように感じずにはおれない現実である。普段の春の光景からは考えられない現実をよそに例年のように春の光が地面に注いでいる。

人呑みし泥の光や蘆の角

高野 ムツオ

行方不明者を捜して泥は掻き上げられ、浚われ、何度も繰り返し上を下へ、下を上へと掘り返されては均される。川のほとりは特に集中的に搜索されただろう。幾人もの人を呑み込んだ泥は春の光にてらてら照っている。同じところからいつもの春のように蘆が角ぐむ。

やがて血の音して沈む春夕日

高野 ムツオ

夕日の赤さは美しさと同時に不気味さも感じさせる。真っ赤な夕日が、「やがて」沈んでいく時、血の色ではなく「血の音」を立てていると見たのである。色を音として視覚が捉えたのである。滅びゆく音か。真っ赤な血を滴らせているかのようにごうごうと音響を上げて燃えていると目が捉えたのである。阿鼻叫喚の津波禍を被った被災地の太陽は、その破壊を嘆く人々の声の刃を日面に浴びながら、どくどくと血を流し、壮絶な音を立てて沈んでいく。

地の底にまで沁みてゆけ牡丹雪

高野 ムツオ

春の牡丹雪は、汚れなく純白、柔らかくふうわりと降る。その春の雪に託したいことがある。地の底深くまで沁みていき、そこに眠る人たちにその清らかな水をもたらしたい。手の届かない地の底である。どうしようもない悲しみ故に、雪に向かって祈るのである。

嘴に動く鱗あり春日に満ち

高野 ムツオ

何の嘴だろうか、何の鱗だろうか。生き物が生き物を捕獲した。嘴が捕えた餌は確かに生きて動いている。川も海も、常ならぬ姿となって人や町や自然に襲いかかった。多くの命を奪い、

連れ去り、隠してしまった。変り果て、どこからも死臭がする。探し当てて人の亡き骸は葬られ、ペット類の亡き骸も埋葬された。それでも、いつまでも、どこかに消毒液が臭う。そんな水辺に、生き物の営みを見たのである。海鳥が小魚を捕獲したか、嘴に啜えた命がもがいている。今、切実に希求するのは動きである。死から逃げ切って活動することである。春の日差しを受けて水辺から命が再生し始めたのである。

囀りの円光死者も入り来よ

高野 ムツオ

「円光」とは後光をいう。春を謳歌する鳥たちの囀りを後光が射しているかのように明るく神々しく感じたのである。未曾有の大惨事は暗黒の闇の中へと人々を追いやり、世界を閉ざし、一筋の光も見出し得ない状況を作った。絶望に打ちひしがれつつも自然界の鳥たちの変わらない営みに気づき、顔を上げたその目に、耳に、「囀りの円光」が捉えられたのである。闇の暗さはその明るさをより明るく感じさせ、聖なるものまでも感じとらせたのである。生者はこれを享受できた。この幸せを死者に捧げたいと思い、円光の中に入って来よと呼びかける。声が明るいばかりではない、鳥たちは子孫を残す営みのために囀り交わすのであるから、明日への希望に膨らんでいる。命をつなぐ術をもった鳥の囀りに明日を閉ざされた死者を呼び入れる。生きて自分は希望の欠片を得ることもあるだろうが、永遠にそれが叶わない死者へ切なく呼びかける。

すぐ消えるされど朝の春の虹

高野 ムツオ

朝・春・虹からイメージするのは明るさ・夢・希望などである。それが「すぐ消える」ことを知りつつ、一瞬の彩りが力になる。絶望の最中であって何かしら明日につながる変化の兆しを切望する心に一縷の望みとなるのである。

二、 蛇笏賞作家は震災をどう詠んだか

1、 黒田杏子の俳句

【略 歴】昭和13年東京生まれ。俳誌「藍生」主宰。句集『日光月光』で第45回蛇笏賞受賞。
【考 察】震災直後から積極的に震災詠を発表。近詠は、未曾有の国難を背景にしながら、俳句の核となる自然を通して悲しみを詠うという方向を示し、極めて高い精神性に至っている。俳句はつまりは自然を詠むものであるが、その自然には、我々を立ち上がらせ、歩ませる力がある。桜の俳句を多く詠み、桜が日本人の悲しみを吸い取り、日本人の喜びをもたらす自然であることを改めて認識し、我々にも気づきを促している。自然は人生の伴侶であるという姿勢である。

地震津波骸原子炉終戦日

黒田 杏子

あの日から半年。「あの日」が共通認識される日が複数になったことが極めて残念である。日本人は2つと数えるか、3つと数えるか、10年とも、65年とも、世代・環境によって異なるが、

さらに4つ、5つと増えていかないとも限らない情勢と自然に慄然とする。今は、多くの日本人が「あの日」をまず今年の3月11日として想起するだろう。東日本の広域で強い地震があった。追いかけて襲った津波、福島第一原発の事故後の有様は、戦争の被害に重ねられて報道されることも多かった。この句は11の漢字、5つの名詞からなる。いずれも禍々しい現実につながる文字であり、言葉である。中に一文字異質なものが紛れ込んでいることに気づく。「むくろ」と読ませる一字である。後世の歴史の教科書にはおそらく載りそうにない一字である。この一字ゆえにこれが文芸になる。同じ意味の「屍」以上に「骸」は強烈である。黒々とした髑髏マークが混在しているのがこの句が描いた現実である。視覚的には経本を見ている印象があり、聴覚的には呪文のように感じられる。じっと目をつぶればそれは祈りの言葉に変わってくる。

天心に彼岸満月生者死者

黒田 杏子

3・11の数日後だったか、欠けたところのない完璧な満月が空にかかり、煌々と辺りを照らし出した夜があった。この非常時にこんなにも美しく静かな月夜があつてよいものかと思つたことだった。平常時の美しい景色が非常時にも広がっていることが罪のように感じられたが、荒涼として広がる被災地の上に同じ月を置いてみて、現実の痛々しい光景が、はっきりとは見えない夜の方が生者と死者の隔たりを縮めたかもしれないと思つた。夜は、生者に束の間の安息と亡き人を思う時間をもたらしめたか。折しも春彼岸、いかなる時にも運行を止めない自然のサイクル、北上した桜前線と同じようにあの夜の月光を冷たいとばかりは感じなかった。

水底のねむりの底に散るさくら

黒田 杏子

古来より今に至るまで世界の海の底にどれほど多くの屍が眠っていることだろう。遠く海外の古代史を紐解いても、近くわが国の歴史を紐解いても、敢無い生涯を閉じた人々はおびただしい数になる。『万葉集』に大伴家持の作として〈海行者 美都久屍 山行者 草牟須屍（海行かば水漬く屍 山行かば草生す屍）〉があり、『古事記』に音橋媛の犠牲の物語があり、『平家物語』に〈波の底にも都の候ふぞ〉と記した安徳天皇入水の件があり、哲学者梅原猛に『水底の歌』があるが、史書や文学書に名が記された人々はごくわずかである。この句は否応なくさまざまな連想へといざなうが、時間・空間をおし広げて水死を強いられた多くの屍への、その一柱一柱への懇ろな弔い心としてみたい。この度の東日本大震災の記憶は未だ生々しく、その犠牲者も主たる数に入る。しかしながらその数を主たるものとするにはあまりにもこの句は美しく切ない。「さくら」と平仮名表記されたことにより散る花びらの一片一片が海の色を背景として鮮明な輪郭を持つ。「水底」も「ねむりの底」も「散るさくら」も本来は清らかなイメージを持つ。水色であり、うす紅である。パステルカラーの明るい春がひたすらに悲しみを呼ぶ。古代史にしても、現代史にしても、昨年のこととしても、その時々海は黒い波に覆われた。その黒い波を鎮めるに作者は「散るさくら」を以てしたのである。

ふるさとの川ふるさとの山さくら

黒田 杏子

これまで「ふるさとの山ふるさとの川」と言い習わしてきた。山と川はふるさとの代名詞であり、いつも二つで一揃いの自然そのものとしてきた。この句は川が先、山が後になるが、山

と川は切り離すことのできない一対のものであることを改めて思う。聞き慣れたこんなフレーズの山と川の位置が入れ替わっただけでも、ささやかな違和感を感じ、それでも変わりなく同じ山と川だと我々は思う。しかしながら、この逆接の接続詞を使わなければならない事態に至った現実には、尽きない怒りが込み上げてくる。最も大切なものが奪われ、破壊され、その変り果てた姿を傍らにした今現在が横たわっているのである。それにしても、詩歌とは何と優しいものか。取り返しのつかない故郷になってしまったことへの激しい怒りを優しく美しく歌うことができるのが日本の詩歌であったか。この句の字並びの優しさ。この句の文字が広げていく無限の懐かしさ。故郷の記憶のある我々はまだよいが、穢れなき故郷を知らずにこの世にやってくることになる未来の人々はどうか。彼らに顔向けができない。怒りや悲しみの極みにも感動はある。文字の力、言葉の力、歌の力が無力でないことをこのように句で示されることもそれである。

さくら咲くかなしき國をかなしまず 黒田 杏子

東日本大震災の年も桜は咲いたが、卒業式や入学式が変形で行われたり、付随する行事が中止されたりして、桜に気持ちが向かなかった。翌年の桜は記憶に残って美しかった。報道にもしばしば取り上げられ、悲しみの底にいる我々を慰め、微笑ませ、桜の力を改めて強く認識した春であった。花が咲くことが有難く、花を待つこと、見ること、楽しむことが憚ることではなく、咎められることでもないという空気を、あの年ほど幸せに感じたことはなかった。悲しみの極みにも花を美しいと思う日本人を素晴らしいと思った。桜だからだろうか。桜だからこそも思う。桜とはそのような花である。悲しみに寄り添う花である。平仮名の中に一文字組込んだ旧字体の「國」をつくづくと眺めた。この句はすぐに記憶され、独りでに口遊まれる。あの日の前も、その後も、この「國」は変わらない、変えない、そんな思いが募ってくる。「かなしまず」は、そのように促す。

みなぞこのひとのたましひ初ざくら 黒田 杏子

東日本大震災の犠牲者を思う。また、戦艦大和の乗組員を思う。同じ時代に出征して戻って来なかった人々を思う。さらには壇ノ浦の海に沈んだ平家一門を連想し、連想は連想を呼んで万葉集の柿本人麻呂の伝説へと遡る。古来、多くの人々が水底を死に場所としてきた。四囲を海に取り囲まれた日本列島の宿命の一つが垣間見える。はるかなる歴史のことならばそれなりの感慨でとどまるが、ついこの間のあの出来事を忘れることはできない。大津波によるおびただしい犠牲者のことを想像しないわけにはいかない。「海の底にも都はある」とは、思わない。浦島太郎の龍宮城のことなど、この震災以来美しく描くことはできない。津波は歴史や昔話までも根こそぎ持ち去ってしまったようなものだ。海にまつわる夢もロマンも今は描くことができない。そんな深い傷を持つ者であふれているのが被災地である。作者は俳句を詠むことでその被災地に寄り添っている。大惨事の最中は桜どころではなかったが、その時も桜は咲いた。翌年の春には被災地の桜が話題になり、癒えない悲しみの中で桜を愛でる様子が感動的だった。今年、筆者は遅ればせながら被災地を訪ね、入り組んだ海岸線に沿って走った。北国にやって

きた春が山桜を至る所に咲かせている風景を見た。海辺の至る所に見られた更地は現実を語るが、目を山辺に移すと桜が咲く。桜がこの悲しみの被災地に、こんなにもひっそりと、楚々と、気高く、魂を奪う美しさで咲いていることに涙を禁じ得なかった。この句は、水底の現実とこれも紛れもない初桜の咲く現実を詠んで、同時に同じ場所に両極端の現実があること、悲しみと喜びはどちらか一方だけで存在することはないことを気づかせる。水底に沈んだ人々に初桜を捧げる。桜を心待ちするわが民族の心は魂となっても変わらない、たとえ水底に横たわっていても地上の桜の咲く春を心待ちし、それによって深く慰められる。いかんともしがたい死者といかんともしがたい生者が初桜をともしに見るのである。

2. 金子兜太の俳句

【金子兜太略歴】大正8年埼玉県生まれ。「海程」主宰。現代俳句協会会長。第5回現代俳句協会賞。句集『東国抄』で第36回蛇笏賞受賞。

【考察】伝統ある朝日新聞の投稿俳句欄「朝日俳壇」の選者としての社会的と文芸的責任を強く自覚して選に当たっている。震災直後から震災詠が多く投句されたが、金子選はすべてが震災詠で埋まるという週が長く続き、個々の作者および被災者の心に寄り添った評を行ってきた。金子はこれまで戦争体験者として様々なメッセージを発信してきたが、今回の震災・原発事故に関しても強い発信力を発揮している。俳人を超えた活躍である。

津波のあとに老女生きてあり死なぬ 金子 兜太

誰も死ななかつたわけではない。多数の死者が出た。高齢者も多く含まれていた。しかし、自力で、あるいは守られて、助けられて、生き延びた老人も多い。悲劇の最中の感動的な救出劇も伝えられている。しかし、生きるも地獄である。困難はその後の日々に立ちほだかつた。生きるためには物質的なものがまず要る。加えて精神的なものも必要である。何より生きるという意欲がなければ生きられない。「死なぬ」と踏ん張らなければ死ぬしかない。強い精神力で津波後の避難所や仮設住宅で老女が生きていたことに刺激を受けて命を見つめ直した人々も多いだろう。老いの強さ、女の強さが若者や男たちを奮い立たせる。

放射能に追われ流浪の母子に子猫 金子 兜太

流浪という非日常が現代の日本の普通の人々を襲うことになろうとは、予想もしないことであつた。戦争でもない今の日本で、平凡な家族が当てどなくさ迷う事態に陥るとは、思いもしないことであつた。ある日、突然、取る物も取りあえず、日常から非日常へと追いやられた福島の人々の、その一人一人の一日一日の困難を思う。流浪とは、この地からあの地へと、来る日も来る日も宿を変えることをいう。そうしなければ命の危険に曝される。健康に重大な影響を及ぼすとなると、考えたり迷ったりする暇もなく、まずは安全な土地へと逃げ出さざるを得ない。子どもを持った母親には、一刻の猶予もない行動だったことだろう。チェルノブイリの悲劇が先にあつた。10年後、20年後のチェルノブイリの子も達は放射能の影響による身体

の異常を訴え、大きな不安に曝され、それは、結婚・出産の選択にも不安材料になっている。外国の事例が過ぎる。逃げなければならないのだが、どこへ、いつまでなど、目途のない現実が立ち塞がる。そんなとある一日の母子を猫の子が慰める。命ある子猫が人間の母子の命をしばし和ませる。子猫は春に生れる。

被曝の人や牛や夏野をただ歩く **金子 兜太**

ニュースや報道番組は被災地の現実を映し出した。忽然と人が消えた街の様子は現実とは思えなかった。行き来の途絶えた往来に信号機が点滅している光景には、心身が凍りついた。その後、防護服に身を包んで制限時間内だけ自宅に戻る様子も映し出され、日常が奪われた人々の窺い知れない懊悩が想像された。そして、衝撃的に映ったのは、野生化した牛が野や畑や往来を歩いたり走ったりしている光景だった。家畜として人に管理されていた生き物が人の手を離れて放り出された。動物の悲劇も同時に進行していたことに気づかされ、また元の飼い主の心中を推し量るにつけ、再び三度絶句せざるを得なかった。

竹の秋復興の首太き人ら **金子 兜太**

「首太き」のたくましさや力強さ、「人ら」の安心感が「復興」を支え、推し進める。首が太いのは働き盛りの特徴である。彼らが率先すればことは進む。困難を打開するエネルギーとなる。それが複数となれば鬼に金棒。問題を山積する復興計画が緒についたのである。作者の声援が聞こえてくる。

最後に、筆者自身が被災地を訪ね、詠んだ句を付記する。（俳句雑誌「藍生」掲載）

三・一翁の細道忽と消え	太田かほり
花辛夷鳥居の高さに津波痕	〃
子捕ろ子とろ一校丸呑みしたる春	〃
点呼いくたび春泥を鷺掴み	〃
朧夜の更地いづこも墓域めく	〃
かげろふの中より汽笛ぼーと鳴る	〃
遠足の列天国へ発ちたるか	〃
つばくらめ学舎日当たりつつ崩れ	〃
遅き日の波畏まりては寄せて	〃
端午来る校門祈りの場に代り	〃

参考文献

小原啄葉（2012）句集『黒い浪』角川書店

金子兜太（2011）月刊俳誌「海程」平成23年7月号 海程発行所

黒田杏子（2011）月刊俳誌「藍生」平成23年9月号～平成25年7月号藍生発行所

俳句編集部編（2013）「俳句年鑑」2013年版 角川書店

俳句編集部編（2012）月刊俳誌「俳句」平成24年4月号 角川書店

俳壇編集部編（2013）月刊俳誌「俳壇」平成25年4月号 本阿弥書店

照井翠（2012）句集『龍宮』角川書店

NHK学園（2011）「俳句春秋No.126号」NHK出版

（2013.9.24 受稿，2013.10.22 受理）